

## 『太平經鈔』 読書会

二〇一五年一月二十五日(土) 於京都大学京都大學文學部

担当・皇學館大学 松下道信

『太平經鈔』 庚部卷之七(涵七四七、葉一表第一行(葉一表第三行)

### 【原文】

虛無自然圖道必成誠

虛無者、乃內實外虛、有若無也。反其胞胎、與道居也。獨存其心、懸龍慮也。遂爲神室、聚道虛也。但與氣游、故虛無也。在氣與神、其餘悉除也。以心爲主、故得無邪也。詳論其意、無忘真書也。得之則度、世可久游也。何不趣精、反與愚俱也。凶禍一至、被大灾也。棄其真朴、反成土灰也。賢者見書誠之。

### 【校勘】

『太平經合校』卷一百三庚部之一

虛無自然圖道必成誠 .. 太平經作「虛無為自然圖道畢成誠」。

虛無者、乃內實外虛 .. 太平經作「虛無者、乃內實外虛也」。

懸龍慮也 .. 太平經作「縣龍慮也」。

無忘真書也 .. 太平經作「毋忘真書也」。

得之則度、世可久游也 .. 太平經作「得之則度、可久游也」。

### 【訓】

虛無自然と道を圖りて必ず誠を成す

虛無は、乃ち内實にして外虛、有にして無の若きなり。其の胞胎に反り、道と居するなり。獨り其の心を存するのみにして、龍慮に懸くるなり。遂に神室と爲り、道虛を聚むるなり。但だ氣と游ぶのみにして、故に虛無なり。氣と神とに在り、其の餘悉く除するなり。心を以て主と爲し、故に邪無きを得るなり。詳しく其の意を論じて、真書を忘ること無かれ。之を得れば則ち度し、世よ久しく游ぶ可きなり。何ぞ精に趣かず、反て愚と俱にあらんや。凶禍一たび至らば、大灾を被むるなり。其の真朴を棄つれば、反て土灰と成るなり。賢者書を見て之を誠む。

### 【訳】

虛無と自然は道を目指し、(人々に)必ず戒めをもたらすということ

虛無とは内側が実でありつつ外側は虚であり、有にして無のようである。それは、かの母胎に回帰して道と共にある。これはただかの心を存することにあるのであり、老君の神慮に

かかっている。それはやがて神室となり、道と共にある虚を結集する。それらはただ氣と戯れるばかりで、それゆえに虚無なのである。それは氣と神に在り、そのほかは全く何もない。心を主とするゆえに、邪がないことが可能なのだ。詳細にその主旨を考究し、真なる書を忘れてはならない。これを手にすれば道へ至り、幾世にもわたりとこしえに（天地の間を）逍遙することができよう。どうしてこうした精妙なあり方に向かうことなく、逆に愚者と共にあろうとするのか。災いが一たび至るならば、それは大きな被害を受けることとなる。かの純真な無垢の状態を打ち捨てれば、かえつて土くれと成ってしまうことだろう。（そこで）賢者は書を見てこれを戒めとするのだ。

## 【注】

### ○胞胎

葛洪『抱朴子』釋滯「得胎息者、能不以鼻口噓吸、如在胞胎之中、則道成矣。」

『太平經鈔』乙部卷二「胞胎及未成人而死者、謂之無辜承負先人之過。」

### ○龍慮

『史記』老子韓非列傳「孔子去、謂弟子曰、……至於龍吾不能知、其乘風雲而上天。吾今日見老子、其猶龍邪。」

### ○神室

彭曉『周易參同契分章通真義』卷中・類如雞子章第六十四「凡修金液還丹有壇、壇上有爐、爐上有電、電中有鼎、鼎中有神室、神室中有金水也。神室象雞子、金水亦如之。」

### ○氣、神

『太平經合校』四行本末訣第五十八「凡世人神者、皆受之於天氣、天氣者受之於元氣。神者乘氣而行、故人有氣則有神、有神則有氣、神去則氣絕、氣亡則神去。故無神亦死、無氣亦死。」

### ○真朴

『老子』第二十八章「知其榮、守其辱、為天下谷。為天下谷、常德乃足、復歸於樸。樸散則為器、聖人用之、則為官長、故大制不割。」

## 【原文】

無爲者、無不爲也。乃與道連、出嬰兒前、入無間、到於太初、乃返還也。天地初起、陰陽源也。入無爲之術、身可完也。去本來末、道之患也。離其太初、難得完也。去生已遠、就死門也。好爲俗學、傷魂神也。守二忘一、失其相也。可不戒之、道之元也。子專守一、仁賢源

也。天道行一、故完全也。地道行二、與鬼爲鄰也。審知無爲、與其道最神也。詳思其事、真人先也。閉子之金關、無令出門也。寂無聲、長精神。神氣已畢仙道門、易哉大道不復煩。天道無親、歸仁賢也。

### 【校勘】

入無間・太平經作「入無間也」。

乃返還也・太平經作「及反還也」。

好爲俗學・太平經作「好爲俗事」。

可不戒之・太平經作「可不誠哉」。

與鬼爲鄰也・太平經作「與鬼神鄰也」。

無令出門也・太平經作「毋令出門也」。

長精神・太平經作「長精神也」。

神氣已畢仙道門・太平經作「神氣已畢、仙道之門也」。

易哉大道不復煩・太平經作「易哉大道、不復煩也」。

天道無親・太平經作「天道無有親」。

一根萬枝、不無有神・太平經作「一根萬枝無有神」。

俱相混沌出妙門・太平經作「俱相混沌出妙門」。從經。

### 【訓】

無爲は、爲さざる無きなり。乃ち道と連なり、嬰兒の前に出でて、無間に入りて、太初に到り、乃ち返還するなり。天地初めて起きるは、陰陽の源なり。無爲の術に入るれば、身完かる可きなり。本を去りて末に來るは、道の患なり。其の太初を離るれば、完きを得ること難きなり。生を去ること已に遠ければ、死門に就くなり。好みて俗學を爲せば、魂神を傷るなり。二を守りて一を忘るれば、其の相を失ふなり。之を戒まざるべけんや、道の元なり。子専ら一を守るは、仁賢の源なり。天道一を行ふ、故に完全なり。地道二を行ふ、鬼と鄰りと爲るなり。審らに無爲を知らば、其の道と最も神なり。詳らかに其の事を思はば、真人の先ならん。子の金關を閉じ、門より出で令むること無かれ。寂として無聲にして、精神を長ず。神氣已に畢れば仙道の門、易しきかな大道復た煩ならず。天道親無くして仁賢に歸するなり。

自然の法、乃ち道と連なり、之を守らば則ち吉、之を失はば患有力。比するに萬物生じて自ら完し、一根に萬枝あるが若く、神有る無からず。詳らかに其の意を思へば道自ら陳ぶ。俱に混沌を祖として妙門を出で、無増無減にして……。

### 【訳】

無爲は、全てを成し遂げる。これは道とつながっており、嬰兒（のようない完全な状態）以前の姿を取つたり、隙間のないところに出入りしたりして、太初に到達する。これが（道に）

帰るということである。天地の始まりは、陰陽の源である。無為の術に到達すれば、その身を長らえることができる。本源から離れて末節に向かうのは、道から見れば憂患である。かの太初を離れてしまうと、その身を長らえることは難しい。生からはるかに遠ざかってしまうと、死の門にたどり着く。世俗の学を好んで学べば、靈魂を損なうことになる。二を守つて一を忘れれば、その（かりそめの）相（である肉身）を失うだろう。（だから、）これを戒めないわけにゆこうか、それは道の大本であれば。あなたが一を守るのに専念するのは、仁と賢明さの源である。天道は一を行うがために、完全なのだ。地道は二を行い、幽鬼と共ににある。詳細に無為を理解したら、かの道と共にあって最も神妙な存在となろう。細かくそのことを考えてみるならば、真人に先立つ者となろう。あなたの重要な関所（である感覚器官）を閉じ、（精と神を）その門（である感覚器官）より漏らしてはならない。寂然として音も立てずに、精と神を養うのだ。神氣を漏らさないことが成し遂げられればそれこそが仙道の門である。何と容易であろうか、大道はまた煩瑣なものではない。天道は誰かを不当に寵愛することなく、仁者と賢者のもとに訪れるのである。

### 【注】

○無爲者、無不爲也。

『老子』第三十七章「道常無為而無不為。」第四十八章「為學日益、為道日損。損之又損、以至於無為。無為而無不為。」

### ○嬰兒

『老子』第十章「載營魄抱一、能無離乎。專氣致柔、能嬰兒乎。」第二十章「我獨怕兮其未兆。如嬰兒之未孩。憮憮兮若無所歸。衆人皆有餘、而我獨若遺。」第二十八章「知其雄、守其雌、為天下谿。為天下谿、常德不離、復歸於嬰兒。」

『太平經鈔』には六例あり。

『太平經鈔』丁部卷四「故反嬰兒則無凶、老還反少與道通。」

『太平經鈔』戊部卷五「先以安形、始為之、如嬰兒之遊、不用筋力、但用善意。詳念先人獨壽、其治獨意、以何得之。但以至道、繩邪去姦、此若神矣。」

### ○無間

『老子』第四十三章「天下之至柔、馳騁天下之至堅。無有入無間、吾是知無爲之有益。」

『太平經鈔』丙部卷三「故上士修道、先當食炁、是欲與元炁和合、當茅室齋戒、不睹邪惡、日鍊其形、無奪其欲、能出入無間、上助仙真元炁天治也。是為神士、為天之吏也。」

『太平經鈔』庚部卷七「道者、乃皇天之所取法也。最善之稱、冠無上、包無裏、出無間、入無孔、天下凡事之師也。」

### ○太初

『列子』天瑞「子列子曰、昔者聖人因陰陽以統天地。夫有形者生於無形、則天地安從生。」

故曰、有太易、有太初、有太始、有太素。太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。氣形質具而未相離、故曰渾淪。」

『太平經鈔』丁部卷四「上古之時、有智慮無所不照、無所不見、受神明之道、昭然可知、亦自有法度、不失其常。從太初已來、歷有長短、甚深要妙。」

○俗學 『太平經』は「俗事」に作る。

『莊子』繕性「繕性於俗、俗學以求復其初、滑欲於俗、思以求致其明、謂之蔽蒙之民。」  
統古逸叢書本・道藏本『注疏』による。ただし、王先謙本等は、「俗學」の「俗」を衍字とする。

『太平經鈔』戊部卷五「不樂久存者、宜就俗事、但樂止其身而已。」

『太平經鈔』己部卷六「或久久乃能入室而度世、不復譽於俗事。」

○魂神

『後漢書』列女傳・董祀妻「登高遠眺望、魂神忽飛逝。」

『太平經鈔』戊部卷五「形若死灰守魂神、魂神不去乃長存。」

○守二忘一

『太平經鈔』乙部卷二「守一者、天神助之。守二者、地神助之。守三者、人鬼助之。四五者、物祐助之。故守一者延命、二者與凶為期、三者為亂治、守四五者禍日來。」

『太平經鈔』癸部卷十「謂入神之路也、守三不如守二、守二不如守一。深思此言、得道探奧矣。」

○相

『太平經鈔』癸部卷十「道之生人、本皆精氣也、皆有神也。假相名為人。」

○守一

『太平經鈔』乙部卷二「夫一者、乃道之根也、氣之始也、命之所擊屬、眾心之主也。當欲知其實、在中央為根、命之府也。故當深知之、歸仁歸賢使之行。人之根處內、枝葉在外、令守一、皆使還其外、急使治其內、追其遠、治其近。」

『太平經鈔』壬部卷九「問曰、『古今要道、皆言守一可長存而不老。』『人知守一、名為無極之道。人有一身、與精神常合并也。形者乃主死、精神者乃主生、常合即吉、去則凶。無精神則死、有精神則生、常合即為一、可以長存也、常患精神離散、不聚於身中、反令使隨人念而遊行也。故聖人教其守一、言當守一身也。念而不休、精神自來、莫不相應、百病自除、此即長生久視之符也。』」

『太平經』卷三十七・五事解承負法第四十八「以何為初、以思守一、何也。一者、數之始也。一者、生之道也。一者、元氣所起也。一者、天之綱紀也。故使守思一、從上更下也。夫萬物凡事過於大、末不反本者、殊迷不解、故更反本也。」

○為鄰 『太平經』は「為」字なし。

『太平經鈔』乙部卷二「能通神明、有以道為鄰。」「神人曰、決之於明師、行之於身、身變形易、與神道同門、與真為鄰、與神人同戶。」

○真人 『太平經』には神人→真人→仙人→道人の序列あり。

『太平經鈔』乙部卷二「前古神人治之、以真人為臣、以治其民……。其次真人為治、以仙人為臣、……。其次仙人為治、以道人為臣、……。其次霸治、不詳擇其臣、……。」

○金關 『太平經』は「金闕」に作る。

『黃庭內景玉經註』卷上 經「重扉金關密樞機」梁丘子註「金取堅剛也。老子「27」云、善閉者无關捷而不可開。言養生者、善守精神、不妄洩也。」

『淮南子』本經訓「精泄於目、則其視明。在於耳、則其聽聰。留於口、則其言當。集於心、則其慮通。故閉四關則身無患、百節莫苑、莫死莫生、莫虛莫盈、是謂真人。」主術訓「夫目妄視則淫、耳妄聽則惑、口妄言則亂。夫三關者、不可不慎守也。」

○神氣

『太平經鈔』癸部卷十「愚人不知還全其神氣、故失道也。能還反其神氣、即終天年、或增倍者、皆高才。」

○天道無親

『老子』第七十九章「天道無親、常與善人。」

【原文】

自然之法、乃與道連、守之則吉、失之有患。比若萬物生自完、一根萬枝、不無有神。詳思其意道自陳。俱相混沌出妙門、無增無減守自然。凡萬物生自有神、千八百息人為尊、故可不死而長仙、所以早終失自然、禽獸尚度況人焉。愚者賤道、下與地連、仁賢貴道、忽上天門、神道不死、鬼神終焉。子欲為之、如環無端、慎無入有、自益身患、亦無妄去、令人死焉。天地之性、獨貴自然、各順其事、無敢逆焉。道興無為、虛無自然、高士樂之、下士忽焉。詳學知師、亦無忌言、有師明道、無師難傳。學不師訣、君子不言、妄作則亂文、身自凶焉。道已畢備、便成自然。

【校勘】

一根萬枝、不無有神..太平經作「一根萬枝無有神」。

俱相混沌出妙門..太平經作「俱祖混沌出妙門」。從經。

所以早終失自然..太平經作「所以蚤終失自然」。

愚者賤道..太平經作「愚者賤道志」。

鬼神終焉..太平經作「鬼道終焉」。

慎無入有..太平經作「慎毋有奇」。

亦無妄去..太平經作「亦毋妄去」。

無敢逆焉..太平經作「毋敢逆焉」。

下士忽焉..太平經作「下士恚焉」。

詳學知師..太平經作「詳學於師」。從經。

亦無忌言..太平經作「亦毋妄言」。

有師明道..太平經作「有師道明」。

【訓】

自然の法、乃ち道と連なり、之を守らば則ち吉、之を失はば患有力り。比するに萬物生じて自ら完し、一根に萬枝、神有る無からざるが若し。詳らかに其の意を思へば道自ら陳ぶ。俱に混沌を祖として妙門を出で、無増無減にして自然を守る。凡そ萬物生じて自ら神有り、千八百息すれば、人尊しと爲す。故に不死にして長仙たる可し、早く終るは自然を失ふ所以なり。禽獸すら尚ほ度す、況んや人をや。愚者道を賤しみ、下りて地と連なり、仁賢道を貴び、忽ち天門に上る、神道は死せず、鬼道は終焉す。子之を爲さんと欲すれば、環の如く端無く、慎みて有に入ること無かれ、自ら身患を益さん。亦た妄去すること無かれ、人をして死せ令めん。天地の性、獨り自然を貴ぶのみ、各おの其の事に順ひ、敢て焉に逆らふこと無し。道は無爲を興し、虛無自然にして、高士之を樂しみ、下士焉を忽かにす。詳らかに師に學べは、亦た忌言無からん。師有らば道を明らかにし、師無くんば傳ふること難し。學びて師訣ならず、君子は言はず、妄りに作れば則ち文を亂し、身自ら凶ならん。道已に畢く備はれば、便ち自然を成さん。

【訳】

自然の法は道とつながつており、これに従えば幸運が訪れ、これから離れれば災いが起きる。それはあたかも、あらゆるもののが生まれてそれ自身で完結し欠けたところがなく、また、一本の根に無数の枝が生えるのも、神妙なるはたらきによるのにほかならないようなものである。詳細にその道理を考究してみれば、道はおのずと明らかになることだろう。それは混沌を大本とし、靈妙なる門から現れ、増えることも減ることもなく自然のあり方を堅持している。およそ万物が生まれれば（そこには）自ら神が備わる、（中でも）千八百回もの息をする人は最も尊い存在である（？）。それゆえ、死ぬことなく、とこしえに生きる仙人に

なることができるのであり、だから、早逝する者は自然のあり方を失っているのである。鳥や獸ですら救済されるのであるから、ましてや人については言うまでもない。愚者は道を卑しみ、（死後）下降して地下へと向かうが、仁者や賢者は道を貴び、すぐさま天門を上つていく。（こうした）測り知れぬあり方は滅びることなく、鬼神たちは死を迎える。あなたがそのようになりたいと願うならば、輪のように端がないような状態（すなわち、感覚器官から精や神が漏れないような完全な状態）を成し遂げ、ゆめゆめ有限のあり方に没入することのないように。それは、我が身の災厄を増やすことになろう。また、みだりに道のあり方から離れてはならない。それは、人に死をもたらすであろう。天地の性はただ自然を貴ぶだけで、それぞれ自分のすべきことに従事して、それに逆らおうとはしない。道は無為をなし、虚無にして自然であり、優れた士はそれを楽しみ、下らぬ士はそれを軽視する。詳しく（こうした道について）師から学べば、包み隠さず教えてくれよう。（このように）師がいれば道を明らかにできようが、師がいなければ道を伝えることは難しい。学んだとしてもそれが師の口訣によるものでなく、（そもそも）君子は何も言わないものである。勝手に經典を作れば（眞の）經文を乱すこととなり、おのずとその身に災いを招くこととなる。道が完備すれば、自然（の法）が完成する。

## 【注】

### ○自然之法

『老子』第二十五章「人法地、地法天、天法道、道法自然。」

### ○混沌

班固『白虎通』天地「混沌相連、視之不見、聽之不聞、然後剖判。」

『太平經鈔』丁部卷四「古者聖人之教帝王也、深思遠慮、閉其九戶、休其四肢、使其混沌、比若環無端、如胞中之子而無職事、乃能得其理。」

### ○出妙門

『老子』第一章「道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始。有名萬物之母。故常無欲、以觀其妙。常有欲、以觀其微。此兩者、同出而異名、同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門。」

### ○無增無減

『列子』湯問「渤海之東不知幾億萬里、有大壑焉、實惟无底之谷、其下无底、名曰歸墟。八絃九野之水、天漢之流、莫不注之、而无增无減焉。」

### ○千八百息

『黃帝內經太素』嘗五十周「黃帝曰、余願聞五十嘗。岐伯答曰、天周二十八宿、宿三十六分。人氣行一周、一千八分。日行二十分。人經脈上下左右前後二十八脈、周身十六丈二尺、以應二十八宿。漏水下百刻以分昼夜。故人一呼、脈再動氣行三寸。一吸、脈亦再動、氣行三寸。呼吸定息、氣行六寸。……一万三千五百息、氣行五十嘗於身、水下百刻、日行二十八宿、漏水皆輩、脈終央。」

孫思邈『備急千金要方』卷八十一「扁鵲云、黃帝說、晝夜漏下水百刻。凡一刻、人百三十息。十刻一千三百五十息、百刻一萬三千五百息。人之居世、數息之間。」

### ○長仙

『太平經鈔』乙部卷二「故天地不語而長存、其治獨神、神靈不語而長仙、皆以內明而外闇、故為萬道之端。」

### ○天門

『太平經鈔』乙部卷六「神人語真人言、古始學道之時、神遊守柔以自全、積德不止道致仙、乘雲駕龍行天門、隨天轉易若循環。」

### ○神道

『易』觀卦「觀天之神道、而四時不忒、聖人以神道設教、而天下服矣。」孔穎達疏「微妙無方、理不可知、目不可見、不知所以然而然、謂之神道。」

『太平經鈔』乙部卷二「神人曰、決之於明師、行之於身、身變形易、與神道同門、與真為鄰、與神人同戶。」

『太平經鈔』丙部卷三「若此、夫人生受命之時、與天地分身、抱元氣於自然、不飲不食、呼吸陰陽氣而活、不知飢渴、久久離神道遠、漸失根本。」

### ○鬼神 『太平經』は「鬼道」に作る。

『三國志』魏志・張魯傳「魯遂據漢中、以鬼道教民、自號師君。」

### ○高士

『太平經鈔』甲部卷一「至士高士、智慧明達、了然無疑、勤加精進、存習帝訓、憶識大神君之輔相、皆無敢忘。聖君明輔靈官、祐人自得不死、永為種民、升為仙真之官、遂登後聖之位矣。」

### ○下士

『老子』第四十一章「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。」

○忌言 『太平經』は「妄言」に作る。

何晏『論語集解義疏』卷一 梁・皇侃義疏「然朋疎而友親、朋至既樂友至、故忌言。」

『太上洞房內經註』序「存洞房、慎吾所忌言。」

○學不師訣

『太平經合校』卷七十戊部之二・學者得失訣第一百六「讀書見其意、而守師求見訣示解者、是也。讀書不師訣、反自言深獨知之者、非也、內失大道指意也。」

○君子不言

『老子』第二章「是以聖人處無為之事、行不言之教。」第五十六章「知者不言、言者不知。」

○君子不言、妄作則亂

『太平經合校』卷七十一戊部之三・真道九首得失文訣第一百七「故凡學者、迺須得明師、不得明師、失路矣。故師師相傳、迺堅於金石、不以師傳之、名為妄作、則致兇邪矣。真人慎之慎之。」